

おわりに

今日、生徒の学習への動機付けが課題となっている。生徒の実態や要望を調べるために、各事例とも診断的な評価を行った。それによると、生徒は自分の思いを「話したり」「書いたり」することに興味をもっていることがわかる。自己表現活動をとおして、自分の思いが相手に伝わったという達成感を体験させ、具体的な到達目標を示すことで、学習への動機付けになっていた。

外国語科（英語）の学習指導要領では「実践的コミュニケーション能力の育成」が教科の目標であり、評価では、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」が、観点の一つになっている。生徒と生徒との間での、また、生徒と教師との間でのコミュニケーション活動をとおして、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことを織りまぜながら指導することが重視されている。意味のある場面で意味のあるコミュニケーション活動を授業の中に取り入れ、学期に少なくとも一度は、生徒のプレゼンテーションやスピーチ等の表現活動に対する評価を行う場を設けてほしい。評価する際には、到達目標を具体的に示すことはもとより、形成的な評価をとおして段階的に指導することが必要である。各事例を参考にしつつ、各学校の実態に応じて工夫していただきたい。

事例1では、音読をとおして正確に英文が読めるようになり、英語学習への動機付けとなった例である。英語の苦手な生徒にとって、まず最初の目標は、英語が読めるようになることである。事例1の学校では、英語Iの4単位を第1学年と第2学年で分割履修している。週2単位という授業時間数の少ない状況で、生徒は前時の内容を覚えていない、単語の発音が分からないといった問題点があった。評価やワークシートを工夫したり、パワーポイントを使用したり、さらに授業時間以外での音読練習をさせたりいろいろな工夫をした結果、徐々に単語が読めるようになり、学習に自信と興味を感じるようになった。いろいろな問題が交錯している場合は、目標を一つに絞って様々な方法で指導し、「やる気と成果の好循環」を生徒自身に体験させることが一つの突破口になるであろう。

事例2では、教科書の本文を読む前後に、聞いたり、話したり、書いたりする活動を取り入れて、わかりやすく段階的に指導し英語学習に興味をもたせた例である。週4単位の授業を行っているが、学習進度に縛られることなく、教師間で共通理解を図り協力しながら、段階的なタスク活動を取り入れ、わかる授業をじっくりと実践している。その過程で、教科書のトピックを膨らます発展的な教材を示し、何度も練習をさせながら言語材料の定着を図っている点、さらに、インプットを豊富に行い、自分の思いを英語で意欲的に表現させている点にも注目してもらいたい。また、ワークシートにも細やかな配慮が見られるので参考にしていきたい。

事例3では、ALTとのTTの授業において、時事問題を取り上げ生徒の好奇心を刺激し、動機付けを図った例である。ALTに自分の考えを英語で伝えるという「意味のある場面での意味のあるコミュニケーション活動」の事例を紹介できたと思う。社会問題は、生徒にとっては難しいと思われるかもしれないが、生徒の好奇心は奥が深く生徒の反応も予想以上の結果をもたらした。リスニングとライティング、スピーキングを織りまぜた活動になっている。また、事例に盛り込まれている、生徒が書いた英文に対する教師側からのフィードバックにも注目してもらいたい。

最後に、三つの事例で気づいたことは、「よい授業には、知識を授け、それを練習し、その知識を使わせている場面がある」ということである。ともすると、時間や進度に追われ授業中「授けた知識を練習する場」が疎かになりがちである。「練習」があってはじめて「使ってみる」ことに生徒は、喜びや達成感を感じるのだと思う。

**高等学校における教科指導の充実
外国語科（英語）**

発行 平成19年3月
栃木県総合教育センター 研究調査部
〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070
TEL 028-665-7204 FAX 028-665-7303
URL <http://www.tochigi-c.ed.jp>